

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第70号

平成30年6月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

古武士的武将型、乃木希典は楠精神の信奉者

楠兵法・山鹿流兵学の師範、玉木文之進に師事

乃木希典と正行

今月の例会のテーマは、「乃木希典と正行」である。

松下芳男は、人物叢書「乃木希典」の中で、乃木について以下の通り記している。

一 明治建軍から昭和解隊までの75年間において、陸軍大将の高官に登ったものは、実に134名の多数であるが、このうちの幾たりが、今日なお国民の記憶に残っているであろうか。・・・著名な大将でも、大部分は国民の記憶から泡沫のように消え失せて、わずかに残る者は、西郷隆盛、大山巖、それに乃木希典ぐらいではあるまいか。

西郷・大山はしばらく置き、乃木希典はどうしてかくも国民の記憶に残る武将になっているのであろうか。

近代日本史にエポックを画した日露戦争において、世界戦史に特筆される旅順攻略戦に首将であったという事にもあろうが、しかしそれよりも、国民の古武士的武将型の理想像を、彼においてみたからではあるまいか。

(写真：旅順陥落後、水師營で行われた乃木とステッセルの歴史的会見が行われた時の様子。乃木はステッセルに帯剣のままの降伏調印を許した。)

桜井の駅に建つ楠公父子訣別之所碑

松下が云う古武士的武将、乃木希典は楠精神の信奉者であったと、

「乃木希典 高貴なる明治」の筆者岡田幹彦が以下綴っている。

一 乃木は楠木正成を深く崇敬した。乃木の一家をあげての尽忠報国は楠公を見習ったものである。

乃木は楠公に関する書物をできる限り集め、極力これを考究し、その忠烈をしのび、その言行を学んだ。

楠公が正行と別れた桜井の駅には、今日、乃木の筆になる「楠公父子訣別之所」という大石碑が建っている。この石碑が建てら



ステッセル中尉と乃木大将

れる時、関係者より、乃木は碑文の文字を書くべき最適な人物として依頼を受けた。

はじめ乃木はこれを固辞していった。

「楠公は我が国無双の忠臣なり。かかる貴き遺蹟に私が揮毫するは僭越の誇りを懼る」

だが、乃木以外に頼むべき人物はいないとする関係者の懇請を断りきれず、これに応じた。乃木は楠公につき次の歌を詠んでいる。

いたずらに立ち浅りなば楠の本も
いかでかほりを世にとどむべき
根も幹も枝ものこらず朽ち果てし
楠の董りの高くもあるかな

乃木は吉田松陰の叔父、玉木文之進に学ぶ

そして、乃木自身が少なからず楠氏と縁のあることが分かった。乃木希典は、松下村塾の創始者、玉木文之進に師事し、山鹿流兵学＝楠兵法に通じていたのである。

「嗚呼至誠の人 乃木希典將軍」を書いた吉河寅二郎は、同書の中で、玉木文之進と吉田松陰と乃木希典はともに姻戚関係にあたり、一本の縦糸のようなものである、と以下綴っている。

一 まず、玉木文之進は、吉田松陰の叔父にあたる。すなわち、松陰の実父は、杉百合之助（杉家の長男）、その弟が吉田大助であり、大助の弟が玉木文之進である。

松陰は、5歳の時に、子どものなかった吉田家の養子となった。松陰は、兄の杉梅太郎と一緒に叔父の玉木文之進に訓育され、松陰は、13歳の時に、文之進の家学（山鹿流兵学）の後見者となる。

山鹿流兵学は江戸初期の山鹿素行によって始まり、山鹿家を本流とし、松陰の養家先の吉田家にも受け継がれた。吉田大助は、吉田家の第七代にあたり、松陰は第八代目に当たる。吉田家としては、山鹿流兵学の指南役として、どうしても血統を絶つことはできなかったため、松陰を養子にとったものと思われる。この時代の山鹿流兵学の免許皆伝は、玉木文之進のほか林真人、石津兵七等、錚々たる人がいた。

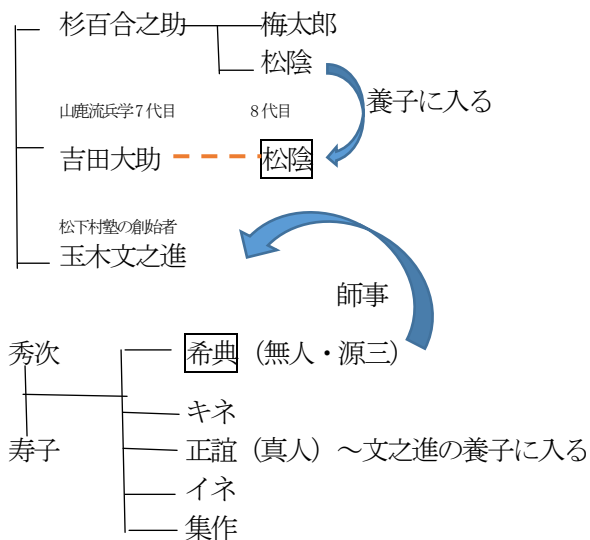
玉木文之進と妻達子との間に実子彦助が生まれたが、若くして亡くなったため乃木希典の弟正誼が玉木家の養子となった。

希典と正誼の間に妹のキネ、正誼と周作との間にイネという妹があり、それぞれ小笠原家と長谷川家に嫁いでいる。

玉木家を継いだ正誼は、後に松陰の兄、杉梅太郎の長女豊子と結婚している。

このように玉木家、杉家、吉田家、乃木家は、互いに深い姻戚関係にあった。

◆吉田家と乃木家の関係



乃木が座右の書とした山鹿素行『中朝事実』

乃木希典は、明治天皇の大喪を目前に、9月10日、皇太子殿下（昭和天皇）の下を訪れ、自費で出版した『中朝事実』に自ら要点に朱を入れ、献上し、「将来、天皇につかされた時のご参考にならましよう」と言ったと伝えられる。

「山鹿素行 中朝実を読む」の著者、新井桂は、現代に通じる『中朝事実』の教えと称し、「中朝事実の核となる部分は端的に申し上げれば、日本書紀などの歴史書や多くの古典を基にして万世一系の皇統と、それを基盤にした日本の歴史、武士道精神の意義を説いたことにある」と記しています。

そして、山鹿素行の思いは、中朝事実の自序に総括されてのべられているとも記しています。

すなわち、山鹿素行は、自分は若いころ、外朝と言われた支那の国の人物を敬慕してきた。今はそのことを後

悔し、最後には「最も素晴らしいのは日本だ」と民族的な自覚に回帰していった——そういう素行の心の変遷がよく分かります、と。
学問によって日本人としての自覚と誇りを呼び覚まされ、日本に生まれたことに無上の喜びを感じたことがこの著述となっていたのでしよう、と。

龍集己酉

山鹿高興謹んで識す

恒に蒼海の窮り無きを觀る者は、其の大なるを知らず、常に原野の畦無きに居る者は、其の廣きを識らず。是れ久しくして狂るればなり。豈唯に海野のみならんや。愚、中華文明の土に生れ、未だ其の美を知らず、専ら外朝の經典を嗜み、嚶嚶として其の人物を慕ふ。何ぞ其れ放心なるや、何ぞ其れ喪志なるや。抑々奇を好むか、將た異を尙ぶか。夫れ中國の水土は萬邦に卓爾たり、而して人物は八紘に精秀たり。故に神明の洋洋たる、聖治の麟麟たる、煥乎たる文物、赫乎たる武徳、以て天壤に比すべきなり。今歳冬十有一月、皇統の實事を編し、兒童をしてこれを誦し、其の本を忘れざらしむと爾云ふ。

◆「中朝事実」自序の大意

常に大海原の極まりなく
 広いのを見ているものは、その広大なことに気付かず、常にあれ野原の限りなく広い中に住む者は、その拡がりを意識しない。

それは長い間にすっかり慣れ親しんでしまったからである。

このことは、海や野原について言えるだけではない。

私もまた、中華文明の日本に生まれていながら、その優美なことに気付かず、もっぱら外来の經典を好み、得意になってその聖賢を慕ってきた。

何と心をほしいままにしたことか、何と志を失ってしまったことか。まるで奇を好み、異を尙（とうと）ぶようである。

そもそも、中華文明の日本の海も国土も、万国に優れ、国民は世界の中の精秀といえる。

それゆえに、その精神も洋々としており、聖天子の優れた統治も永続している。その文化も輝くばかりである。武徳も勢い盛んであって、天地の偉大さにも匹敵すると云えよう。

冬11月24日、皇統の小冊子を編纂して、青少年に読ませ、この国の本を忘れないようにした。

（「山鹿素行『中朝事実』を読む」荒井桂著より転載）

（文責「四條驛補正行の会」代表 扇谷昭）